

稗史を構想する

—原武史『松本清張』で読む昭和史—

花田史彦

一 はじめに

評を加える。

鉄道に造詣が深い政治学者——もとい政治学に造詣が深い「鉄学者」(一)？——の原武史が、明仁天皇・美智子皇后(現在の上皇・上皇后)を論じて「平成の終焉」(二)を見届けたのち、向かった先は「令和」ではなく「昭和」であった。

その成果が、『松本清張』で読む昭和史』(NHK出版、二〇一九年。以下、本書)である。本書は、作家・松本清張(一九〇九—一九二二)の作品を読み解くことで、「昭和史」と対峙した野心作だ。

本稿では、本書の内容を紹介したうえで、さらに論

二 本書の内容

本書は以下の構成となっている。ここでは各章の内容について、順を追って簡単にまとめていく。

はじめに—昭和史の闇を照らす

第一章 格差社会の正体—『点と線』

第二章 高度経済成長の陰に—『砂の器』

第三章 占領期の謎に挑む—『日本の黒い霧』

第四章 青年将校はなぜ暴走したか—『昭和史発掘』

第五章 見えざる宮中の闇―『神々の乱心』

終章 「平成史」は発掘されるか

おわりに

目次を見て分かるとおり、本書は松本清張の伝記ではない。清張が遺した主要な作品（「点」）を読み解くことで、戦前から戦後までの昭和期日本の構造（「線」）を浮かび上がらせるのが、本書の狙いである。まさに清張の代表作『点と線』というわけだ。本書のタイトルで、松本清張の四文字が鉤括弧でくくられているのも、そのような仕掛けを暗示しているかのようである。最終的に、本書の読者は小説を「資料」として読み、また作家という存在を歴史叙述の担い手として捉えるひとつの実験を体験するだろう。

まず、「はじめに―昭和史の闇を照らす」で松本清張を取り上げる意義が示されている。そのひとつは、「清張の作品が戦後史の縮図である」という点（九頁）、いまひとつは「清張の作品が」タブーをつくらないとい

う点」（一〇頁）であるという。

具体的には、高度経済成長期における日本列島の風景や人々の生活を生々しく切り取っていく筆力をもって、「天皇制、被差別部落、ハンセン病といった」しばしばタブー視され、私たちは正面から向き合うことを避けがち（一〇頁）なテーマに挑んでいったことが、清張作品ならではの魅力であると原は述べている。

このように清張の作品全体について概説をしたのち、基本的には発表された順に、各章で個別の作品読解が行われていく。

第一章「格差社会の正体―『点と線』では、福岡市香椎を舞台にした推理小説『点と線』『旅』一九五七年二月号―五八年一月号に連載。単行本は一九五八年二月に光文社から刊行）について論じられている。

原によれば、清張は「鉄道に象徴される近現代的な視点と、鉄道などが生まれる遙か以前の、神話や伝説に近い時代を見る視点」（二〇頁）と具えた作家であった。神功皇后ゆかりの地とされている福岡市香椎を

舞台にした『点と線』では、作中で起こる事件のトリックに鉄道の時刻表が利用されている。事件そのものはもちろん創作なのだが、登場人物が考え出すトリックは、現実の鉄道ダイヤにもとづいている。こうした仕掛けが、清張作品のリアリティを担保していると原は述べる。

また、本章で原が『点と線』のなかに清張ならではのふたつの視点を見出していることは重要である。すなわち鉄道（テクノロジー）と神話であり、両者は近代天皇制の成立に欠かせない条件である^③。

第二章「高度経済成長の陰に―『砂の器』では、ハンセン病者への差別を主題とした推理小説『砂の器』『読売新聞』夕刊一九六〇年五月一七日―六一年四月二〇日に連載。単行本は一九六一年七月に光文社から刊行）について論じられている。

本書で取り上げられている清張の作品は、すべて高度経済成長期以降に発表されたものである。この日本史上まれにみる社会変動が起こっていた時期にあって、

しかし戦前以来根強く残存するハンセン病者への差別という問題を扱ったのが、『砂の器』であった。

『点と線』同様、鉄道や地域間格差を物語の動因として織り込みながら、『砂の器』は展開していく。天皇制に関する分析は本章では後景化しているが、もともとハンセン病患者の隔離は明治政府が定めた法律に則って行われたものであるから、本章も広い意味で近代天皇制の問題を取り上げたものと考ええることも可能だろう。

第三章「占領期の謎に挑む―『日本の黒い霧』では、これまでに取り上げられた『点と線』と『砂の器』に共通する「ノンフィクションの要素」（九〇頁）を全面展開するかたちで書かれた『日本の黒い霧』（『文藝春秋』一九六〇年一月号―二月号に連載。単行本は一九六〇年に文藝春秋新社から刊行）について論じられている。同作は、帝銀事件や下山事件、松川事件など、占領期の日本で起こった「怪事件」について清張なりの推理を試みたものである。さまざまな事件の要因を

「GHQの陰謀」に求めてしまう清張の見解については、原も距離をとりつつ、しかし「占領」という問題そのものは、現在も積み残されたままになっていると述べている。『日本の黒い霧』から思い起こさなければならぬのは、米軍基地が沖縄に集中する前の本土の姿なので「(二〇二頁)と原は問題提起を行なっている。この原の指摘は、『日本の黒い霧』発表から六〇年を経た現在も、とりわけ沖縄が「占領期的状況」にあることにも注意を向けさせてくれる。

また本章では、古代史から近現代史までをカバーする清張の守備範囲の広さを強調し、翻って学問の「タコソバ化」に対する批判も行われている。

第四章「青年将校はなぜ暴走したか―昭和史発掘」では、『日本の黒い霧』同様、ノンフィクションとして書かれた『昭和史発掘』(『週刊文春』一九六四年七月六日号―七月二日号)に連載。単行本は一九六五―七二年に文藝春秋新社・文藝春秋から刊行)について論じられている。

原は『昭和史発掘』を、とくに記述が厚い二・二六事件(一九三六年)を中心に解説していく。まず同作は、「オーラルヒストリー」の先駆的な成果として位置づけられている。執筆当時は、また「戦前」の生き証人を数多く有する時代であった。清張はそうした当時の条件を存分に活かしながら、多くの当事者に話を聞き、執筆を行なったのである。

同時に、原が『昭和史発掘』の意義として強調しているのは、清張が二・二六事件の「叛乱軍(襲撃した側)」だけでなく「鎮圧した側の史料」(一一三頁)も読み込んでいたことである。それによって清張は、青年将校たちの目的が「宮城占拠」と昭和天皇の奪取にあったことを実証していったという。

また本章では、清張の同時代人で青年将校に憧憬の念を抱いていた三島由紀夫の決起にも、『昭和史発掘』で明らかとなった青年将校の計画が影響したのはいか、という原の推理も展開されている。加えて、二・二六事件当時の秩父宮(昭和天皇の弟)と青年将校た

ちとの親密な関係、ひいてはクーデターによる秩父宮擁立構想にも想像力をめぐらせている。清張のみならず、原の大胆な推理も披露される刺激的な章である。そして本書は、いよいよ天皇制の本丸「宮中」へと接近していく。

第五章「見えざる宮中の闇―『神々の乱心』では、清張の未完の遺作『神々の乱心』(『週刊文春』一九九〇年三月二十九日―一九九二年五月二日に連載。単行本は一九九七年に文藝春秋から刊行) について論じられている。同作は、『昭和史発掘』同様、一九三〇年代を舞台に、月辰会という架空の新興宗教団体を描いた作品である。月辰会は女官・元女官を信徒として抱え、宮中への接近を試みる。最終的には、月辰会がもっている「三種の神器」こそが「本物」であると世間に発表し、皇室に対するクーデターを構想するのである。

原はこの月辰会を、清張が生前に見ることがかなわなかった『昭和天皇実録』などの資料も用いて、一九三〇年代の葛藤する宮中の表象として読み解いていく。

たとえば、教団内で教祖の平田有信以上に力をもっていた「シャーマン」の江森静子は、「神ながらの道」を学び、本書第一章でも登場した神功皇后に自らの姿を重ね、夫である大正天皇の死後も権力をもちつづけた貞明皇后^④の写し絵だったのではないか、というように。

こうした読解をとおして原が強調するのは、宮中において女性(皇族から女官まで含む)がもった権力、そして彼女たちの「シャーマン」的な性格である。これは何も、小説や過去の出来事に限られた話ではないと原は言う。二〇一六年、明仁天皇が「象徴天皇としてのお務めについての天皇陛下のおことば」において、天皇の務めとして「何よりもまず国民の安寧と幸せを祈ること」を第一に考えてきたことを表明した。これを受けて、原は「天皇にとつて」大切なのは「祈ること」、すなわち宮中祭祀なのです(一九六頁)と述べる。近代天皇制の核心には、「祈り」という「神秘的」かつ「古代的」なる要素が存在し、しかもそれは、戦

後の象徴天皇制にも継承されている。そのことを喝破していたのが、『神々の乱心』という作品だったのではないか。そのように原は同作を読み解いたわけである。

評者には、月辰会は出口なおを教祖とする民衆宗教・大本をモデルにしているのではないかとも思われたが^⑤、原の読解も興味深い。もちろん、清張が複数モデルを想定していた可能性も考えられる。

いずれにしても、『神々の乱心』という未完の大作を遺して、清張は一九九二年、『平成』という時代を十分に見ることなく逝った。

終章「平成史」は発掘されるか^⑥では、原は清張を、同じく「国民作家」と呼ばれた司馬遼太郎（一九二三―一九六六）と比較している。原は、司馬作品の「明るさ」と清張作品の「暗さ」、あるいは男性中心的な歴史観を披瀝した司馬に対し女性の権力を重く見た清張、といったように両者の違いを明快に描き出す。「清張には女性の読者も大変多くいます」（二〇五頁）という指摘も、今後検証に値する興味深い記述である。

さらに原は、「司馬（遼太郎）の明治と比較すると、昭和史家としての清張は、特にアカデミズムの世界では不当なほど黙殺されているように思います」（二〇五―二〇六頁）と述べ、しかし「いまなお解明されない天皇制の深層を見据えようとした、スケールの大きな歴史家ないし思想家として『清張を』見ることが必要」（二〇六頁）とまとめている。この点については、のちほど詳しく検討してみたい。

最後に原は、「もし清張がいま生きていて『平成史発掘』を書くとしたら、どういうテーマを選ぶでしょうか」（二〇七頁）と問題を提起し、清張が選んだであろうテーマとして、一九九五年のオウム事件、明仁天皇・美智子皇后の即位以来三〇年の歩み、東日本大震災、明仁天皇退位へのプロセスといった事例を挙げている。そして、いずれについても清張は『昭和史発掘』同様、あらゆる手を尽くして検証していっただろうと原は考える。

もちろん清張はすでに鬼籍に入っており、彼の手に

よる『平成史発掘』を読める日は永遠に訪れない。しかしながら、清張の作品は古びることがないと考える原は、次のように本章を結んでいる。

三 総評

清張は未完の大作『神々の乱心』を通して、「祈り」

における女性の存在の重要性を示そうとしました。

しかも女性を重視する視点は、初期の小説である

『点と線』から一貫しています。令和の天皇制を

考える上でも、清張の視点は重要な示唆を与えて

くれるのです。(二二六―二二七頁)

『神々の乱心』同様に、清張が対峙しつづけた近代天皇制そのものも、現時点で我々にとつて「未完」の課題である。巨大な課題を前にしたときには、目の前の事象に引き摺られることなく立ち止まり、たとえば清張という先達の仕事を参照することが重要になってくるはずである。そのような視点を示しつつ、原は本章と本書を締めくくっていると見えよう。

まず本書の書誌情報を紹介しながら、論評に移っていききたい。

原が松本清張について書くのは、本書が初めてではない。書籍化されたものだけでも、すでに『松本清張の「遺言」―『神々の乱心』を読み解く』（文藝春秋、二〇〇九年）、およびその増補版『松本清張の「遺言」―『昭和史発掘』『神々の乱心』を読み解く』（文藝春秋、二〇一八年）、『NHKテキスト 一〇〇分d e名著 松本清張スペシャル 昭和とは何だったか』（NHK出版、二〇一八年）の三冊がある。

また、『松本清張傑作選―時刻表を殺意が走る』（新潮社、二〇一三年）の選者も原は務めている。筋金入りの清張ファンである。

本書のもとになったのは、先に紹介した『NHKテキスト 一〇〇分d e名著』である。同書は、NHK

Eテレ「二〇〇分d e名著 松本清張スペシャル」(二〇一八年三月放映、全四回)のテキストとして刊行されたものだ。この番組に原は「指南役(講師)」として出演し、番組用のテキストも執筆した。本書は、「このテキスト」「NHKテキスト 一〇〇分d e名著」を加筆修正しつつ、新たに「第三章 占領期の謎に挑む―『日本の黒い霧』と「終章 『平成史』は発掘されるか」を加えたもの」(二二〇頁)である。

したがって本書は、これまでに原が『神々の乱心』と『昭和史発掘』を中心に行なってきた清張論に、新たに「占領」や「高度経済成長」(『点と線』『砂の器』『日本の黒い霧』)といった戦後のな主題を加えたものと言うことができる。つまり、『神々の乱心』や『昭和史発掘』の「その後の時代」を描いた作品を加えることで、戦前・戦後を貫く日本社会の構造を見渡す松本清張論が、あらためて編み直されたということになる。繰り返しになるが、本書は原ならではの着眼点をもって、松本清張の小説を政治思想史の「資料」として

読み解いた興味深い作品となっている。

他方で、フィクションを「資料」として読んでいく原のような試みは、近年の歴史研究においてしばしば散見される。たとえば、小津安二郎監督の映画作品から帝国日本の構造を読み解いた與那覇潤⁵⁶、歴史のなかの「流言」や大衆娯楽雑誌『キング』を分析した佐藤卓己⁵⁷、仮想戦記小説に注目し「歴史のなかのief」を研究している赤上裕幸⁵⁸、あるいは竹内洋の『青い山脈』論⁵⁹や、稲垣恭子の「朝ドラ」論⁶⁰、植民地期台湾の「伝説」や「夢」の次元に照準した駒込武⁶¹、田中智子・和崎光太郎が註と解説を加えて装いを新たにした、西川祐子による岸田俊子の評伝小説⁶²などが目をひく。

したがって原の松本清張論は、独創的な仕事であると同時に、たとえば右に挙げたような、今日の歴史研究者がゆるやかに共有している「創作物とどう向き合うか」という課題に挑んだものでもあると言える。

さしあたり、本書をそつした大きな脈絡において位

置づけたうえで、以下では本書に対して三点に分けて具体的に論評を行なうことで、原の清張論をさらに深める一助としたい。

まず一点目である。清張のテキストの「正確さ」や「先見性」を証明していく原の作業は、言うまでもなく研究において不可欠の作業である。とくに列車の座席の特徴や時刻表にまで詳しく言及した分析は、「鉄学者」原の面目躍如というべきものであろう。

他方で、作家という職業に固有の性格について、より踏み込んだ記述がなされるべきだったようにも思われる。作家とは、自らが書く文章を「売り物」にできなくてはならない職業である。書いたものを売ることで生計を立てる。この点において作家は、政治思想史という学問領域の主たる対象である政治家や官僚、学者とは決定的に異なる。作家は組織に雇用されて給料をもらうのではなく、「筆一本」で生きていく。実際にそのような生き方ができている作家は限られてくるだろうが、少なくともそうした規範・願望は共有されて

いるはずである。

筆一本で生きていくというのは、ひとりで生きていくことを意味しない。むしろ筆一本で生きていくためにこそ、一定数の読者の存在が不可欠である。そして読者を獲得するためには、出版社や新聞社、書店といった組織の力が欠かせない。さらに言えば、映画化・テレビドラマ化された清張作品も数多い。本書のタイトルどおり、松本清張を鉤括弧つきの「松本清張」として考察していくには、そうした出版史・メディア史的な視点も有効だろう⁽¹¹¹⁾。

「松本清張」がいかに流通し、いかに消費されてきたのかという巨大な課題に答える用意は、残念ながら評者にはない。ただ、せめて評者の研究対象のなかからその一例を紹介しておこう。

映画評論家の佐藤忠男（一九三〇―）は、一九七八年に刊行された『苦勞人の文学』（千曲秀版社）のなかで、長谷川伸や吉川英治とともに松本清張に論及し、清張の仕事を次のように位置づけている。

それらは、かつて山路愛山とか徳富蘇峰とかいった学者的ジャーナリストたちによって担われていた史論というジャンルを現代に復活させたものと言っているであろう。松本清張の史論は、日本の社会における差別構造の告発という一点が軸となつて古代史から現代史までを貫いている。(二四)

さらに佐藤は、清張による史論の「かなめ」になる作品として、『象徴の設計』と『小説東京帝国大学』とを挙げている。『小説東京帝国大学』を選んでいるのは、「教育評論家」としても精力的に活動してきた佐藤らしいが(二五)、『象徴の設計』という選書も興味深い。

『象徴の設計』は、山県有朋を主人公に、竹橋事件(二八七八年)を契機とした軍人勅諭(二八八二年)の成立過程を描いた作品である。

つまり、言うまでもなく明治期、それも一九世紀の日本を描いたものであるが、その作品のタイトルに「象

徴」という、日本国憲法第一条を想起させる言葉を清張が用いたことを、どう考えればよいのだろうか。明治の段階で、すでに象徴天皇制(的な秩序)が「到達目標」として設定されていたと清張は考えていたのであるか。だとすれば、現在の天皇制研究の水準(二六)からしても、中らずと雖も遠からず、といったところであり、ここにもまた清張の(また佐藤の)「慧眼」を見出すことが可能なのかもしれない。

このように、佐藤忠男の清張論には本書を補う視点が存在していると評者には思われる。たとえば佐藤に倣つて、「史論(家)」というキーワードを導入してみることで、松本清張という人物の輪郭がより明確になったのではないだろうか。

有馬学も、『昭和史発掘 特別篇』(文藝春秋、二〇一九年)に寄せた解説のなかで、かつて「昭和史」を検証することが(いま)を批判的に語る「方法」だった時代があった、そのような時代に要請されたのが清張であった、という趣旨のことを述べている(二七)。有

馬のこの見立ても、清張を史論家として考えてみよう、という提案として読むことができるだろう。二〇二〇年現在において「史論の復権」^(二)がなされるべきかどうかは、評者には判断がつきかねるが、少なくとも明治期より下った昭和戦後期にも「史論(家)」の存在を認める広義の史学的作業は、有意義なものである(一九)。

一点目について述べる。原が政治思想史を論ずる際、「鉄道」とともに重きを置いてきた要素が「女性」である。たとえば『皇居考』(講談社、二〇一五年)、『(女帝)の日本史』(NHK出版、二〇一七年)といった仕事に、その視点が端的にあらわれている。それらの具体的な成果物とおして、日本の権力機構における女性(皇族)の存在感を示し、ひいては政治思想史という学問領域の男性中心主義的な歴史観を批判してきたのが、原の仕事の特徴である(二〇)。

そうした原の学問的立場を踏まえるならば、『昭和史発掘』やその巨大な副産物である『二・二六事件』研

究資料』(全三巻、文藝春秋、一九七六・八六・九三年)に多大な貢献をした女性編集者・藤井康栄について、本書でも少し紙幅を割いてもよかったのではないか。加藤陽子によれば、『文藝春秋』での「昭和史発掘」連載前に「現代史をやる」、「他人の使った材料では書きたくない」、「二級資料がほしい」とのたまう作家の、すべてのお膳立て、先行取材をしたのが、藤井であった」という。「出版社に女性専用のトイレも少なかった」一九六〇年代のことである(二一)。

本書でも、清張の作品でしばしば女性登場人物が物語のカギを握っていることには言及されるが、清張にとって「女性」とは、作中のキーパーソンというだけでなく、そもそも作品を生み出すために欠かせない実在のキーパーソンだったのである。そしてこの事実が、一点目の批判とも連動する。清張の作品を、編集者をはじめとした複数の担い手による共同作業の成果として、読むことが必要であろう。そのとき、鉤括弧つきの「松本清張」がより鮮明に浮かび上がってくるので

はないだろうか。

三、二点目について述べる。先に紹介したとおり、原は「司馬の明治と比較すると、昭和史家としての清張は、特にアカデミズムの世界では不当なほど黙殺されているように思います」(二〇五—二〇六頁)と述べている。しかし、すでに本稿では、原のほかに、歴史学者である有馬宇と加藤陽子の清張論を引用してきた。とくに加藤は、『昭和史発掘』や『二・二六事件—研究資料』が自身の研究に不可欠であったことを、率直かつ具体的に書いている^(二〇)。清張は、決して「黙殺」されていないのではないだろうか。

本書で具体的に批判対象になっているのは、筒井清忠『二・二六事件と青年将校』(吉川弘文館、二〇一四年)である。原によれば同書は、「宮城占拠計画について、清張が『昭和史発掘』ではじめて明らかにしたこと」に十分な敬意を払わず、あたかも清張が「警視庁占拠部隊を宮城に入れようとしていたのだ」というような

推理^(二一)(傍点引用者)だけをしてきたかのように記した「研究書」(二〇六頁)であるという。

そう言い切つてよいものだろうか。同書のなかで筒井は、『昭和史発掘』と『二・二六事件—研究資料』を「二・二六事件の研究史」という章のなかで取り上げ、「松本が二・二六事件研究のための多くの基本資料を発見した意義は大きい。〔中略〕ただし、やむをえないこととはいえ今日の研究水準からすると誤りも少なくない」^(二二)と紹介してもいる。やはり評者には、清張が「黙殺」どころか非常に高く評価されているように読める。「今日の研究水準からすると誤りも少なくない」という指摘は、清張に限らず、あらゆる研究者に当てはまり得るものだろう。そして、ある研究成果の誤りが見つかり、学説が修正・更新されていくこと自体は、恥ずべきことではない。真に恥ずべきことがあるとすれば、誰も誤りを見つけれないほどに、あるいは誤りを見つけても誰もそれを指摘したり認めたりできな

いほどに、学問の世界が停滞してしまふことであろう。

むしろ、有馬、加藤、筒井をしてここまで言わしめたことを、清張の昭和史家としての力量を示す証左として、本書は強調すべきだったのではないだろうか。

ちなみに、「昭和史家としての清張」に限定せず「古代史家としての清張」に目を向けてみれば、たとえば『古代史疑 増補新版』（中央公論新社、二〇一七年）の解説は森浩一と門脇禎二という、考古学・古代史の泰斗が担当している。また同書には、牧健二、上田正昭、佐原眞、井上光貞ら考古学者・歴史学者と清張とのシンポジウムの記録も収録されている。

あるいは評者が樂觀的過ぎるのかもしれないが、原が述べるほど「アカデミズムの世界」は作家に対して不寛容ではないと思われる。

以上、評者なりに本書を読み解いてきた。清張の作品同様、多彩な論点が提供され、平易でありながら読み心えのある一冊である。百戦錬磨の専門家を唸らせる本格派の新書も良いが、本書のような一般向けの「新

書らしい新書」もまた必要である。当たり前だが、専門家として自身の専門分野の外では素人なのだから。

本書が教えるとおおり、たしかに歴史とは学者の占有物ではない。同時に、これもまた本書が教えるとおおり、清張の想像力の源泉となったのは、膨大な資料に裏打ちされた歴史的事実の検証、さらには資料集刊行による反証可能性の担保という、すぐれて学問的な作業に他ならない。

なお、清張が資料集を編んだという事実は、司馬遼太郎との違いを考える際にも重要な意味をもつと思われる。作品内容の違い以上に、資料集を出す意志や力量の有無が、両者の「歴史家」としての違いを雄弁に物語っているのではないだろうか。

四 おわりに

本書に導かれながら松本清張という作家を見ていると、原理的に創作と史実とは対立しないし、作家と学

者も対立しないはずなのだ、あらためて考えさせられる。

無論、それぞれが「同じ」と言いたいわけではない。

作家には作家の、学者には学者の領分というものがある。ただ、作家であれ学者であれ、歴史研究を行なう者はすべからず、属性や分野の違いを「優劣」の問題に置き換えることを注意深く回避しながら、また同時に相互批判・論争を厭うことなく、歴史への「真摯さ」(四)を涵養し共有していかなくてはならないのだろう。そのために「松本清張」から学ぶことはたくさんある。

そのような、言うは易く行ふは難しい営為の実践例として、また来たるべき原武史『平成史発掘』への橋頭堡として、本書は読み継がれていくはずである。

(一) 「鉄舌者」は、原がたびたび自称している肩書きである。たとえば、原武史・三浦しをん『皇幸』小説、ふらふら鉄道のこと』角川書店、二〇一九年を参照。

(二) 原武史『平成の終焉―退位と天皇・皇位』岩波書店、二〇一九年。
(三) 詳しくは、原武史『可視化された帝国―近代日本の行幸啓 増補版』みすず書房、二〇一一年を参照。

(四) 貞明皇原が昭和天皇の時代になっても権力をもちつづけたことについては、原武史『昭和天皇』岩波書店、二〇〇八年を参照。

(五) なお、原武史『松本清張の「遺言」―昭和史発掘「神々の乱心」を読み解く』文藝春秋、二〇一八年には、大本への言及もあつた。

(六) 與那郡潤瀆『帝国の残影―兵士・小津安二郎の昭和史』NTT出版、二〇一一年。

(七) 佐藤卓己『流言のメディア史』岩波書店、二〇一九年。同『キングの時代―国民大衆雑誌の公共性』二〇二〇年、岩波書店。

(八) 赤上裕幸『もしもあの時』の社会学―歴史にifがあつたなら』筑摩書房、二〇一八年。なお同書の書評として、花田史彦『歴史(受字)のための弁明―赤上裕幸『もしもあの時』の社会学―歴史にifがあつたなら』『京都メディアア史研究年報』第五号、二〇一九年四月がある。

(九) 竹内洋『革新幻想の戦後史』下巻、中央公論新社、二〇一五年。なお、竹内の『青い山脈』テキスト読解に対して、同作の受容史をあとづけたのが、花田史彦『民主主義 から「戦後主義」へ―映画「青い山脈」(一九四九年)をめぐる輿論と世論』『京都メディアア史研究年報』創刊号、二〇一五年四月である。

(一〇) 稲垣恭子『教育文化の社会学』放送大学教育振興会、二〇一七年、第四章。

(一一) 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、一九九六年。同『世界史のなかの台湾植民地支配―台南長老教中学校からの視座』岩波書店、二〇一五年。

(一二) 西川祐子『花の妹 岸田俊子伝―女性民権運動の先駆者』岩波書店、二〇一九年(原著は、『花の妹 岸田俊子伝』新潮社、一九八六年)。

(一三) こう提案しながら、また同時に、評者はメディア史研究がどこまで「文学」や「小説」というものを扱ってきたかどうかと、本書を読みながら考えもした。松本清張は『文藝春秋』や『中央公論』、『婦人公論』といった「論壇雑誌」と呼ばれる媒体にしばしば作品を発表していた。「論壇雑誌」研究としては、たとえば竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌』教養メディアの盛衰』創元社、二〇一四年があり、先に挙げた三誌についてもそれぞれ一章が割り当てられている。ただ、いずれも「文学」や「小説」への目配りは薄い。

(一四) 佐藤忠男『苦勞人の文学』千曲秀版社、一九七八年、六四頁。なお余談ではあるが、仮に佐藤が述べたように清張の仕事が「差別構造」を告発する史論だったとするのであれば、ひろたまき校注『日本近代思想大系 三―差別の諸相』岩波書店、一九九〇年に代表される全体史的な仕事とも共振可能性があるように思われる。

(一五) 佐藤忠男の「教育評論家」としての仕事については、花田史彦「評論家」と「評論」と歴史研究『日本教育史往来』第二四一号、二〇一九年八月を参照。

(一六) 天皇制の戦前・戦後を貫く連続性を指摘した研究として、たとえは、河西秀哉『近代天皇制から象徴天皇制へ―「象徴」への道程』吉田書店、二〇一八年がある。また、原が専門とする政治思想史の領域において、象徴天皇制が戦前以来の知識人にとってひとつの「理想」であったことを明らかにした研究として、荻部直『光の領国 和辻哲郎』岩波書店、二〇一〇年もある。清張もまた、明治という「戦前」に「象徴」の起点を見出していたのかもしれない。もっとも、本のタイトルを作家自身がつけたとは限らないのであるが。

(一七) 有馬学「解説」『同時代史としての「昭和史発掘」』松本清張『昭和史発掘 特別篇』文藝春秋、二〇一九年。

(一八) 與那覇潤『史論の復権 與那覇潤対論集』新潮社、二〇一三年。

(一九) そのような作業にあたっては、たとえば松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』山川出版社、二〇一五年が参考になるだろう。

(二〇) なお、最近でも松田宏二郎が、関口すみ子『国民道徳とジェンダー―福沢諭吉・井上哲次郎・和辻哲郎』東京大学出版会、二〇〇七年を例に挙げ、同書が「政治思想研究の作法」で書かれているにもかかわらず、「思想史研究」というよりジェンダー研究のカテゴリーに押し込まれて、思想史一般への貢献を軽視されているのではないかという懸念を表明している(松田宏二郎「コラム 一」 明治知識人研究の動向」小林和彦編『明治史研究の最前線』筑摩書房、二〇一〇年、一一四頁)。この松田の指摘からも、原と通底する問題意識を見て取ることができる。

(二一) 加藤陽子「解説」松本清張『昭和史発掘 新装版』第九巻、文藝春秋、二〇〇五年、三九一頁。

(二二) 同右、三九二―三九五頁。

(二三) 筒井清忠『二・二六事件と青年将校』吉川弘文館、二〇一四年、二四一頁。

(二四) 保刈美『ブレイカル・オーラル・ヒストリー―オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店、二〇一八年、三四頁。